



全国各地の高校生たちが生命科学研究の取り組みについて発表する「第11回高校生バイオサミットin鶴岡」の

成果発表部門で経済産業大臣賞を受けた。

発表したテーマは「プラスチックを分解する海洋微生物の探索」。

審査員の指摘や他の高校生の発表から新たな視点が得られた。「もっと研究したい」という意欲が高まった」と

話す。

酒田東高3年。高校入學とともに、慶應義塾大

先端生命科学研究所(鶴岡市)の特別研究生のセレクトを受け合レクシオンを格、海洋プラスチックごみ問題の解決に向けた研究を開始した。

もっと研究したい意欲高まった

研究の背景にあるのは、

中学時代に日本青年会議所「グローバルユース国連大使」で派遣されたカノンホジアで見た貧困の中で暮らす人々の姿。「汚れた環境で生きる子どもたち、亡くなっていくお

たことがあった。滅菌状態を作るためのガスバーナーで指をやけどしたことも」と。審査員からは

「海洋プラスチック問題の解決に向けた新たな微生物技術のシーズとなることが期待される」と高

年寄りを目の当たりにして環境問題に興味を持つた。

研究では、プラスチックを効率よく分解する微生物の探索に向けて実験に取り組んだ。今となっては笑い話で済ませるが、

「研究テーマが全部消え、目線から取り組んでみて」とアドバイ

く評価された。

後に続く人たちに對し「『何でだろう?』と思いつながら生活することが大事。結果が出る、出ないはともかく、まずは自分がやりたいことをやってほしい。その際はさまざま

「これまでの研究を継続できる大学に進学したい。進学後はまちづくりなど文系の研究ともコラボできたら」。研究生としての活動をひとまず置き、受験生の顔になった。



サミットでバイオ産業大臣賞がわら

菅原 さくら さん

◇ 大学進学後の夢の一つとして掲げるのは海外留学。「行った先の『土地の菌』を用いた研究がしたい」。SDGs(持続可能な開発目標)が叫ばれる昨今、さまざまな環境問題の解決に貢献できるような研究者になることを思い描いている。酒田市在住。18歳。